

第23回 夏期福音特別集会 (2)

終末的希望

――ロマ書第8章 他――

1976年8月21日 (鹿沢)

小池辰雄

終末的希望 末の世に信を見んや 神さまの目的 素晴らしい天国、終末の現実 新しき約束
としてキリストが再臨する 天国的な現実をキリストは見せてくださった 信・望・愛の主体
は全部キリスト 苦難を通して歓喜へ 天国の鍵 聖霊の助け 御霊を消すな パウロの呻き

●終末的希望

この世の中で一番貴いものは信仰の友たちです。その他は何もいらん。私は、尊敬する内村鑑三先生の孫弟子みたいな者です。何といっても、内村先生というのは日本が産んだ第一級の人物の一人です。藤井武先生は、それほど知られていませんが、質からいうと内村先生にも劣らないところの人物です。要するに、人が大事なんです。日本人はいろいろな優れた才能がありますから、才能の上からいつて一級的なものがたくさんあります。けれども、今一番欲しいのは、特に政治界がそうですけれども、人物です。器の大小はいろいろです。けれども、質的に言つて、人物が非常に少ない。

「今は、神の言を聴く飢饉である」

とアモスが言いましたが、日本は人物の飢饉である。教育が人物をつくらない。

一人ひとりが自分の本質に一番即した、神さまから頂いた一番の中心のもの、それに打ち込んでいく。本質即使命なんです。本質即使命という角度で、教育者が一人ひとりを本当に教育しなければ。教育と云ったって、その使命を自覚させて促すだけの話です。これはソクラテスが言っているとおりの、産婆役です。天賦のあるところに天職あり、という。天から授かったところの素質、そこに天職がある。人に何と思われようが、どのように評価されなろうが、そんなことは問題ではない。相手はキリストです。西郷南洲が言いました、「人を相手にせず、天を相手にせよ」

と。彼は本当にそういう魂です。南洲の

「敬天愛人」

という文字を見ているだけで靈感に撃たれる。この文字は躍動して叫んでいる。

聖書というのは旧約、新約と言いますが、これは約束なんです。旧るき約束、新しき約束。預言者たちがキリストを知らずしてするところの預言は、その知られざるところの一者に集中しているわけです。キリストに焦点を結んでいる。預言者たちは結局何を言っている



かというところ、終末的な希望を語っている、

「今に神の国がくる」

と。そして、神の国の中心体、天国体は、預言者たちが上から受けた光を結んだ焦点はキリスト・イエスです。それからまた光が出ていく、これは使徒です。そして、やがてもう一つ焦点を結ぶ、これは再臨のキリストです。朝日は西の方に焦点を結ぶ。夕日はまた東の方に焦点を結ぶ。

そういう最後の終末の希望です。人生は大したことはない。これから百年たてばここに居る人は皆いなくなる。地上の人生は序曲にすぎない。本曲は天界においてある。希望なき人生は人生ではない。我々の希望はこの地上における希望ではない。地上になんか希望はありはしない。希望ははるかかなた、永遠の世界にある。新天新地に向かつての大希望です。これが終末的希望です。旧約の預言者たちがそれを謳っているから、所々を見てくださいまし。

● 末の世に信を見んや

イザヤ書2章、

「すえの日にエホバの家の山はもろもろの山のいただきに堅く立ち、もろもろの嶺よりもたかく拳がり、すべての国は流れのごとく之につかん。おおくの民ゆきて相語りいわん、いざわれらエホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん、神われらにその道をおしえ給わん、われらその路をあゆむべしと。その律法はシオンよりいでエホバの言はエルサレムより出づべければなり。」

預言者の言葉は全部、詩ですよ。よく対句になっている。「律法」を「エホバの言」と言い換えている。神の言が活ける律法なんです。モーセに顕れた「十誡」ばかりが律法ではない。「シオン」と「エルサレム」は同じことです。ユダヤ人はこれを言葉通り、イスラエルに限って考えているわけだ。けれども、「シオン」とか「エルサレム」というのは天界のシオン、天界のエルサレムです。預言者は知らずして――自分たちはそこまで自覚しているかは知らんけれども――次元が違ったところを指している。パウロがそのことをハッキリ言っている。

エホバはもろもろの国のあいだを裁き、おおくの民をせめたまわん。斯てかれらはその剣をうちかえて鋤となし、その鎗をうちかえて鎌となし、国は国にむかいて剣をあげず、戦闘のことを再びまなばざるべし。」(イザヤ2:2-4)

20世紀はどうですか? とんでもない。その正反対だ。この預言の正反対です。「戦争は止む」という。やまないですよ、戦争は世界がひっくり返るまで止まない。全世界が悔い改めるということは考えられない。聖書は「だんだん人間は進化し進歩して遂に神の国がくる」なんて、ひとつも言っていない。だんだんダメになる。



「末の世に信を見んや」

とキリストは言われた。その通り今は末の世、末世だ。地上には希望はない。希望は天界から来る。いくら教育しても、伝道しても、ダメなんです。ダメだからやめるのではない。ダメであればあるほどやらざるを得ないけれども、その果は地上では結ばない、極少数の人にしか結ばない。真理は少数の中にある。大衆の中にはない。ところが、今はどうですか、すべて多数決でやる。

●神さまの目的

聖書は希望がある。なぜ希望があるかというと、神さまが目的を持っている。神さまは目的を持ってこの宇宙を、我々の世界を、人類をお造りになった。

今の若い人に抱負を聞くと、嫌になっちゃおうよな、この頃日本は野球王国みたいだから、「野球選手になりたい」なんてのは。昔の青年のような――だいたい空想的な希望もあるけれども――抱負を持たない。「とにかく食べていければいいや」なんてのは、とんでもない。非常に現実主義、瞬間主義だ。藤井先生は、

「真理のためには飢え死にしたっていいではないか」

と言われました。内村先生は神さまの宇宙の完成の目的を叫んで、

「宇宙の完成を祈る」

と言って仆たおれました。なんと言っても、内村先生は魂の人です。

そういう目的、これに対して、我々に対して約束をアブラハム以下ずっとくださり、預言者には最後の日の預言を、このような

「戦争まで止む時がくる」

と示されている。ところが、それは手放しではこない。神さまに本当に連なっていないから、神を相手にしてないから。

「知識もの基もといはエホバを畏おそるにあり」

と「箴言しんげん」にあるとおりです。学問の基もといは畏神にある。今の口語訳新約聖書には「畏」の字がない。畏れかしこむという字を「恐」と書いてある。神さまを恐がってビクビクしたってしょうがない。神さまの前に平伏することが畏なんです。平伏し身を投ずること。神さまは喜んで捕まえてくださる。

西郷南洲の歌に、

「二つなき道にこの身を棄て小舟波立たばとて風吹かばとて」

とある。「敬天愛人」という二つなき道にこの身を棄てる。波が立とうが風が吹こうが、そのように棄てられた小舟は沈まない。棄て小舟に夜もすがら端坐して明け方、「噫」という鳥の声を聞いて、悟ったのは一休和尚です。そういう南洲の歌のように、二つなきこの福音に私たちは自分の身を棄ててかかる。



「身を棄ててこそ浮かぶ瀬もあれ」

というが、「瀬もあれ」どころのさわぎではない。

泳ぎの呼吸もそうです。浮かうとしたら沈む、疲れる。全身を波に委ねて、クジラのよ
うに鼻と口だけを瞬間的に出して、息を吸ったり吐いたりする。その呼吸が分かったら、
少し波があるほうが面白い。足と手をストロークした後で、完全に全身を水の中に入れる。
そして休んでしまう。その静動を交互にする。静中の動、動中の静という。静動の呼吸。
真理の世界は全部リズムミカルです。全身を波に委ねる。誰でも浮く。泳ぐときは決して力
んではいけない。波に委ねている。いつも委ねの態勢が大切です。委ねると、神さまの方
から力がくる。

●素晴らしい天国、終末の現実

イザヤ書11章に、

「エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて実をむすばん。そ
の上にエホバの霊とどまらん。」

とある。これはメシヤの預言です。正に霊止です。神さまの霊が止まる。これはあなた方
自身のこと言っているんですよ。ものごとは何でも自分に引きつけて読んでいかなければ
ダメです。三人称的に読んでいたらダメ。一人称・単数・現在で読むことです。

ギリシヤ語で未来形が使っている。そうすると、今の口語訳の聖書では「であろう」と
訳す。未来でも「である」と訳さなければダメです。向こうの言葉は時称がうるさいから、
未来のことには未来形を形として使うだけのはなしです。内容はハッキリしている。それ
を日本語の「であろう」にすると、何か蓋然性になっちゃってしまつて、「多分そうだろう」なん
ていうことになる。信仰の世界は「多分そうだろう」ではどうにもならん。「である」です。
ギリシヤ語・ヘブライ語の外側の文法なんか破った、本当の意をつかんだ、神の根源語を
つかんだ訳し方をしないとね。訳がまた新しき創造になる。神の言は無限の意味をもつて
いるから、「これこれの意味でござい」なんてものではない。

これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。

「謀略」は思慮、「才能」はむしろ能力、「知識」はエヒグノーシスです。

かれはエホバを畏るるをもて歡樂とし

「畏神をもつて歡樂とする」と。「神さまー」と言つて平伏すと、それが本当にうれしい。

「おののきをもて口づけせよ」

という言葉が詩篇第2篇にある。

また目みるところによりて審判をなさず、耳きくところによりて断定をなさ
ず。正義をもて貧しき者をさばき公平をもて国のうちの卑しき者のために
断定をなし、その口の杖をもて国をうち、その口唇の氣息をもて悪人をつ



すべし。

「正義」は義です。「氣息」は靈氣です。テサロニケにこれと同じ言葉が出てきます。

正義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとならん。

おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、犢こえおうし肥た
る家畜ともに居りてちいさき童子わらべにみちびかれ、牝牛と熊とはくいものを同
にし、熊の子と牛の子とともにふし、獅ししはうしのごとく藁ちのみぐをくらい、乳兒は
毒蛇のほらにたわむれ、乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん。かくてわ
が聖山きよきやまのいずこにても害そこなうことなく傷やぶることなからん。そは水の海をおおえ
るごとくエホバをしろの知識地にみつければなり。」(イザヤ11・1～9)

「知識」とあるが、「エホバをしろ」というのは全存在をもつて知ること、頭で知ることではない。「知る」という言葉はすぐ頭に響くけれども、聖書の「知る」は決してそんな頭の「知る」ではない。

こういう、まるで考えられないような、お伽話とぎばなしみたいなことを言っている。それくらい現実、自然界は美わしいけれども、また自然界にも弱肉強食がある。預言者はそういう事態を見て言っている、「それではダメだ。そうではない」と。それは先ず一番先に、

「人間そのものが喧嘩、戦争なんかしているうちは、自然界もダメだ」

と。これはパウロがロマ書8章の18節以下で言っている。だから、自然界も人間界も本当に終末の希望をもっている人には、呻きの内容なんです――嘆き、呻き、祈り――「それではいかん」と。預言者たちはそういう素晴らしい天国、終末の現実を見ている。そういう天国を、イザヤ書を題材にしてルーベンスが描いている。

●新しき約束としてキリストが再臨する

「万軍のエホバこの山にてもろもろの民のために肥えたるものをもて宴をもうけ、久しくたくわえたる葡萄酒をもて宴をもうく。臚ずいおおき肥えたるもの久しくたくわえたる清すめるぶどう酒の宴なり。又この山にてもろもろの民のかぶれる面かおおいともろもろの国のおおえるおおいぎぬをとりのぞき、とこしえまで死を吞はみたまわん。主エホバはすべての面より涙をぬぐい、全地のうえよりその民の凌辱はづかしめをのぞき給わん。これはエホバの語りたまえるなり。」(イザヤ25・6～8)

最後のこの希望がなかったら、もし人生がこの地上だけだったら、私は窒息しそうです。私の生命の一つの秘訣の一面は、この終末的希望を現在としてもっていることです。

キリストの十字架は二千年前の事実です。キリストの十字架は二千年前の、我々の歴史からいうと、相対的な事実です。ところが、この相対的な事実が即、啓示の事実、神さまの啓示の事実です。ですから、啓示の事実、二千年前の相対的な事実よりももうひとつ奥



の事実としてある。啓示の事実は必ず現在に、天界に生きてありたもうキリストと同時に、今我々の眼前に、十字架に架かつていたもうところのキリストが在りたもう。パウロが、

「十字架につけられたままのキリストの他は知るまじ」

と言った。二千年前の事だつたら、関わりない。現在、我々にこれを受けとるか受けとらないかを、十字架の贖いを受けとるか受けとらないかを、事実をもつて迫ってくる。

「十字架の言」とは、十字架が我々に言葉以上の言葉として――事實はいわゆる言葉以上のものです――我々に迫ってくる。それによって、本当の「今こそ新たに変わった」という「メ、ン」という事態が生じた。「十字架と復活と聖霊」は離すことができません。

神さまは、創造は目的をもっている。そして、我々にそれを約束してくださっている。旧き約束、旧約、そして今度は、新しき約束としてキリストが再臨する。その時に、新天地の、最後の審判がある。審判というのはちゃんと毎日ある。信ずる者には、審判を正直に受けとる者には即恩恵になる。審きの義が即、恵の義になる。

「わが義はちかずきわが救すでに出たり。わが臂はもろもろの民をさばかん。もろもろの島はわれを俟望み、わがかいなに依頼まん。」

という不思議な言葉がある。「さばかん」と言いながら、「依頼まん」という。「義」と「救」が同義語に使っている。

なんじら目をあげて天を觀また下なる地をみよ、天は烟のごとくきえ、地は衣のごとくふるび、その中にすむ者これとひとしく死なん。されどわが救はとこしえにながらえ、わが義はくだくることなし。」(イザヤ51・5、6)

これも救と義がひとつです。

「カタストローフエが来る。驚くべき転変地異が起きて、エライことになる。それから救がくるぞ」

と。これは預言者エレミヤの凄い言葉がある。

「嗚呼、わが腸よ、我腸よ、痛苦心の底におよび、心胸とどろく。われ黙しがたし。我が靈魂よ、汝らつばの声と軍の鬨をきくなり。敗滅に敗滅のしらせあり。この地は皆荒らされ、わが幕屋は頃刻にやぶられ、我が幕は忽ち破られたり。」

これは中身は未来完了ですよ、預言ですから。

我が旗をみ、らつばの声をきくは何時までぞや。それ我が民は愚かにして我を識らず、拙き子等にして曉ることなし。彼らは悪を行うに智けれども善を行ふことを知らず。

エレミヤは南ユダの国の滅亡の夕べに出た預言者です。もうやがてユダは滅びてしまう。北イスラエルも南ユダも要するに、アッシリヤとバビロニアにやつつけられてしまうことは、目に見るようになっていくから、そういう預言が出てくるわけです。



われ地を見るに形なくして空しくあり、天を仰ぐにそこに光なし。我山を見るに皆震えまた諸の丘も動けり。我見るに人あることなし、天空の鳥も皆飛びされり。我みるに肥美なる地は沙漠となり、且つその諸の邑はエホバの前にその烈しき怒の前に毀たれたり。」(エレミヤ4・19、26)

審判の預言――アモスにもこのような凄い言葉がある――と同時に、預言者はまた驚くべき輝かしい美しい新天新地を預言している。審判と恩恵とが離すことができない。審判が今度は与える義になつてしまう。

●天国的な現実をキリストは見せてくださった

イザヤ書35章はもちろんそうですが、とにかく、人間界、自然界が調和と幸いな楽園、パラダイスになる。旧約の預言者たちのその大希望を現実に見せてくださったのがイエス・キリストです。福音書において、人々にけなされている者たち、いろいろな肉体的な欠陥のある人たちが癒され、また死人すらも甦えらされてしまった。そのような天国的な現実をキリストは見せてくださった。あのキリストの福音書の恩寵の事実全部、終末の預言なんです。事実が預言している。

我々の間でも、聖霊をいただきますと、事実が預言している。聖霊の御働きによって、素晴らしい伝道者にされてしまう。なろうとしてなるのではない。これは事実が示している。

「汝ら、わが証人となれ」

と。キリスト者とは、キリストを事実をもつて証しするものでなければ、どんなに口でしゃべったってダメです。事実が文字です。これは不立文字です。いわゆる文字にはならない。我々は活字なんです、活きている字だ。

創造の神さまは創造の霊を私たちにくださる。そして、また非常に目的ですから、その点では仏教の悟りとは違う。仏教の世界は現実の悟りだから。けれども、創造してやまない、非常に生命的なのが福音の世界です。

ペテロが、

「金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリス

トの名によりて歩め。」(使徒3・6)

と言ったら、生まれつきの跛者が立つてしまった。驚くべき事実です。使徒行伝の現実本当にペテロもパウロももの凄い証者です。信仰とは「信行」と書いた方がいい。私が「パウロの信仰」と言った「信仰」というのは、パウロの「全存在の在り方」を信仰と言ったので、「信・望・愛」の信ではない。

●信・望・愛の主体は全部キリスト

マルティン・ルッターが言いました、



「本当の信仰とは我々の中における神の業^{わざ}である。人間を、旧きアダムを、殺して新しく生まれしめる。その心も意志も感情も全部新しく変質させて、聖霊をもたらしめるのである。善きことをしようと思わない前にもう既に善き事はしてある」

「善き行いのない信仰は空しい」

とヤコブが言いましたけれども、ヤコブは「行」の面を強く言ったものだから、ルッターが、

「ヤコブ書は藁^{わら}の書翰だ、パウロの信仰の方が本当だ」

なんて言ったが、あれはルッターはちよつと間違えた。ヤコブ書は「行」に力を入れていなければならない、いわゆる行為を言っているのではない。全実存を語っている。全実存は信、即行です。我々はルッターの言葉よりももうひとつ深くつかまえてはいけません。

「信ずるということが神の業^{わざ}である」

ということは、我々の中における内的な最ももの凄い業なんです。「内的な行為」が信仰なんです。それが外側に現れてくるのがいわゆる行為なんです。人間というのはダメなものだから、外側が現れなかったりする。現れても少し違うふうになったりする。けれども、それは偽りではない。

「信仰は分かった。次に、信仰に従って一生懸命に行為をやっていきましょう」

なんて努力する。これはくたびれるよ、どっちも本当でなくなってしまう。信一本でいくと、それが展開し始める。それは聖霊の力が来ているから、その信が動く。いわゆる信仰ではダメです、聖霊の力がきていなければ。だから、信即行一如の世界です。信じ、神・キリストと霊的に交わる「信交」の世界です。

「信・望・愛」というと、みなこつち側のことだと思っているけれども、信の主体も、望の主体も、愛の主体も全部、キリストであります。キリストはわが信なり、キリストはわが望なり、キリストはわが愛なりということ。「キリストを信ずる」のではない。

「キリストはわが信である。信の主体はキリストである」

ということ。誰に、キリストが神さまを信じたあの信じ方ができますか。

「我を見し者は父を見しなり」

と、誰が言えますか。けれども、私たちの一番奥では、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と――そんなことは言う必要はありませんよ、現実の人間は罪びとだから――けれども、

「この我がうちなるキリストの信を見てくれ」

ということです。無条件にいただいたものだから。キリストの実存の信を無条件にいただいている。これを動かすことができますか。「自分の信仰」なんてやっているから、私は、

「信仰に絶しなさい。わが信に絶しろ。絶信のところには本当の信がくるぞ、それはキリストの信が入ってくるから」



と言う。親鸞が「無義の義」ということを言いました。あれがそうです。

●苦難を通って歓喜へ

キリストという信が、贖いを通して甦りの生命・聖霊となつてやつてきた。「十字架と復活と聖霊」が渾然^{こんぜん}として、「キリストの信」として私たちの中にやつてくる。これは恩恵^{めぐみ}です。「キリストはわが信」というのは「キリストはわが恵み」というのと同じことです。パウロが、

「恩恵により、信仰によりて我々は救われた」

と言っている。恵信一如です。大事なのはこの恵みの方です。この恵みは、私が今言つたこの信なんです。

「われ思うに、今の時の苦難^{くるしみ}は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに

足らず。」(ロマ8・18)

この「栄光」(ドクサ「ギ」、カードーシュ「へ」)に、その終末の世界の大希望にパウロは生きていた。パウロの伝道力は、この未来を待ち望んでいるが、その待ち望みが現在化している。希望ばかりでボーヤツとして夢みているようなことだったらダメです。それは空望になります。希望をして希望たらしめるものは苦難です。キリストと共に十字架を負う苦難。ベートルヴェンは、この地上において

「苦難を通って歓喜へ」(ドウルヒ・ライデン・フロイデ)

と言いました。私たちの希望は歓喜の内容です。喜びの音信はキリストが現在くれたが、また未来にあつてもまた喜びの音信が待っている。クリスチャンほど喜びを持っている人はない。しかしながら、クリスチャンほど深刻な悲しみを持っているものもない。

ドストエフスキーの文学がそういった性格を持っている、もの凄い終末の希望を持っている。あれは十字架の文学です。トルストイは少し甘いけれどもね。ユーゴーの『レミゼラブル』はいい。

「無相法身」とはいい言葉だ。本質がつかめない、相が無い。「相が無い」ということは「無限の相を持っている」ということです。それが本当の「法身」です。エホバの法を、キリストの法を身につけているものを法身という。

私はみなキリストの光で読んでしまう。仏教にとらわれているのも何でもない。善きものは、真理は、「ありがとうございます」と言つてどしどし自由自在にそれを活かしていく。私するのではない。パウロという人はそういう幅をもっていた。

「凡そ善き事、美しき事、正しき事を汝ら尊べ」

と言う。人間にはいろいろな良いものがある、それを尊びなさいと。彼は決して気違いではない。もの凄い焦点をもっていると共に、もの凄い幅をもっている。信仰の世界に入ると、これほど豊かなことはない。

「その高さ、深さ、長さのいかばかりなるかを」



と、測りしれないという。表現なんかできない。パウロの書翰はあまりもの凄くて、どうにもならん。

皆さん普段、聖書を破りとしてポケットに入れておきなさいよ、聖書は我々の生命の延長ですから。

「お前たちは私の活ける文字だ」

とパウロも言ったではないですか。

「われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。」(ロマ8・18)

と。今の苦難をいい加減にしていない。いろいろな苦しみ悩みがある。「あの人は本当に苦しむために生まれてきたような人だ」というのがある。苦難の一生を負って逝ってしまった、そういう人は天界で高いところに在いますから。

「それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。造られたるものの虚無むなしきに服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。

これは人の罪のために神さまがそういうようにしてしまった。

然れどなお造られたる者にも滅亡ほろびの僕たる状さまより解かれて、

正に「滅亡の僕」だ。サタンの手下になつていること。

神の子たちの光栄の自由に入る望みは存のこれり。」(ロマ8・19～21)

●天国の鍵

キリストは神の子です。我々はキリストを受けとったから、やはり神の子である。だから、

「アッバー、父よ」

と呼べる。

「御国みくにを来たせたまえ」

という主の祈りがある。これは、御国が来ているから、そう祈れる。御国が来ていなくて、「御国を来たせたまえ」と祈るから、空念仏になる。聖霊という御国の一番中核が来ているから、聖霊が来ているから、必ず御国は来る。だから、「御国を来たせたまえ」という祈りが力強い祈りになる。

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

とは、

「恵福さいわいなるかな、汝、わが十字架によって霊が完全に貧しくされた者よ。天国即ち

聖霊の我、汝のうちにあり」

と響いてきた。私はそのように受けとった時にぶつ倒れた。そうしたら、あとのキリストの言は全部読めてしまった。これは天国の鍵です。

神の国は終末に來ると同時に、現に我々の中に、また我々の間に在るというわけです。



二重構造です。現在、今、来ているということ、^{まさか}將に必ず来る。明日にもくるかも知れない。二千年たつても来ないけれども。「そうすると何千年後だろう」なんて、そうではない。いよいよ質的には迫っている。過去も現在も未来も、永遠なる今という角度から全部これを受けとってしまったっている、地獄も煉獄も天国も。ダンテは三界を遍歴したけれども、我々の今の地上の生活は煉獄の世界です。鍛えられている。そして、ここにはまた地獄もある。戦争というとてもない地獄の光景がある。

「戦争の時は法は沈黙する」

というドイツ語の言葉があるが、実際にそうだ。男は喧嘩、争う。女は妬む。「妬み争い」は男と女の悪いところだ。そういうものが毒している。文明の公害現象よりももっとやつかいな公害現象は我々の心の中にあるところの事態です。

癌は大変な病気だけれども、心の中の癌はもっと悪い。この心の中の癌を癒してください。癌は取り除いてくださったのが、キリストの十字架であります。十字架の他に我々の心の中の癌を取り除けるものはない。聖霊が全身をかけめぐっているような人は恐らく癌にかからないのではないかと思う。たとえ病で寝ていても、元気な人よりもその人が健やかであるということは、聖霊を宿している人はそうなんです。キリストを受けとっている世界は、根源現実においては、もし癌を持っていたとしても癌は治つていけると言える。

●聖霊の助け

私の信仰は図太いんです。神さまはひどい神さまだ、ひどい神さまを信ずるのが本当の信仰だ。辻褄^{つじつま}の合うような神さまを信ずるのは信仰でも何でもありません。キリストは、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と叫んだではないですか。そういう神さまなんだ。あれは義の叫びです。あの叫びがなかったら、十字架の大事な意義が消えてしまう。そういう本当のドラマチックな構造がわかりますか、頭では分かります。

「斯くのごとく御霊も我らの弱^{よわき}を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知

らざれども、御霊みずから言い難き嘆き(呻き)をもて執成し給う。」(ロマ8・

26)

「嘆き」ではなく「呻き」です。これは聖書の最も深い言葉の一つです。この「助ける」という言葉が非常に深い言葉で、「スユナンティラムバノマイ」という。三字から成り立っていて、「スユン」とは「共に」、「アンティ」は「その代わりに」、「ラムバノマイ」は「人のために荷を担う」という字です。「助ける」とはその人と一緒になってその人に代わってその荷を担うということです。その人と一緒にその人に代わって、本当に共に苦しみながら、それを担っていく。ドロ沼の中に自分も入って担いあげる。聖霊はそうようにして私たちが呻きをもつて執成してくださる。



「言葉にならない呻きだ」

という。苦難の中で聖霊のこの「助け」がなかったら、パウロは死んでしまったでしょう。けれども、その聖霊の担いでパウロは助けられました。ついに彼は殉教の死を遂げるけれども、時満つるまで神さまは活かしたもう。イスパニアへ、西の極にまで彼は行きたかったのだけれども。それは烈々たるものです。

誰が知らなくても、聖霊はあなた方の中に入って、担ってください。この中にも幾度か死にそうになった病氣をもっている人があります。これみな、御霊が助け、言い難き呻きをもつて執成し力を与えてくださっている。

「福音は言^{ことば}にあらず、力なり」

という。キリストという原始力である。聖霊という原始力である。それは、一緒になって苦難を突破して、もの凄い栄光の世界が、終末の世界が約束されて待っている。

●御霊を消すな

アメリカの宣教師ヘップバーンという人が横浜で使徒行伝を2章から講じた。始めは三日間のつもりだったのが、聖霊が満ちて、とうとう一か月続いてしまった。そこであそこ^こに火がついた。これを「横浜バンド」という。熊本バンド、横浜バンド、札幌バンドと三か所に火がついたわけです。札幌はクラーク先生です。

明治6年に横浜バンドの合同集会を築地でやった。その時にもの凄いバイブルで、道行く人が何か教会の中に吸い込まれるようにして入って行ったという。内村鑑三先生もそこへやってきた。使徒行伝第1章のような聖霊のバプテスマ式なことが起きた。せっかくそれだけの恩寵に与かりながら、「あの時はちょっと行き過ぎていたな」というわけで——「お前たちは気違いではないか」なんて使徒行伝に書いてあるけれども、それと同じように——後から自分たちで消してしまった。せっかく燃えた火を常恒の、常燃の火に、常に燃えている火に変えないからいかん、消してしまうから。

「御霊を消すな」

とパウロが言っているではないですか。常燃の火、静かに燃える赤い炭火。初めは、燃える時にはパーッと炎がたつよ。いつまでも炎をたてるようなことはしてはいかん。そうするとそれこそおかしいことになる。しかし、いざという時には炎がたつ常燃の火。浅間山の火みたいに静かに煙を吐いている。いざとなったら爆発する。

そのように、聖霊の現象に囚われたから、今度は現象を一生懸命で警戒することになった。御霊の世界は深く燃えている世界です。現象に囚われると却ってダメになる。神さまは与えようとなさるときには与えるものは与えたもう。徴そのものを求めたらいけません。徴がもっているところの内実を本当につかんでいかなければ。

キリストそれ自身は最大の徴です。神さまの徴です。パウロはキリストの十字架の「ステイ



グマ」(徴)をもつていた。アッシジのフランシスが金曜日に祈ると、^{てのひら}掌から血が出たそうだ。

●パウロの呻き

パウロは今でも聖霊の呻きをキリストと共に天界で呻いている。U兄に示されたパウロの言を紹介します。

「主は言われる。主にありて喜べ。主にありて悲しめ。主の御意をのみ為しなさい。主と共に在れ。世界は亡ぶ、世界は滅ぶ。悔改めよ。主に戻れ、主に戻れ。戦が始まる。すべての人々はみな死ぬ。地球は破滅じゃ。全人類に未来はない。

唯一の希望は今すぐ主に立ち帰ることだ。それしかない。今じゃ、今じゃ。伝えよ、主を伝えよ。選び召されし者よ、祈れ、主に用いられんことを祈りなさい。主は人類を愛される。愛するがゆえに審かれるのじゃ。人類は自ら破滅の道をたどる、自ら。よいか、直ちに祈りなさい、直ちに、直ちに。兄弟よ、主にある兄弟よ、主の悲しみを知れ、主の悲しみを知ってくれ。よいか、涙を知ってくれ。もはや、われ生くるにあらず。よいか、主の涙を知ってください。いいですか。

直ちに、主に在りて用いられんことを。ただ祈れ、祈りなさい。主の僕パウロ」

そういう異言の内容です。パウロが天界でどのように執成して祈っている。深い聖霊の呻きの声、烈しい怒、また、底なき愛、そういう矛盾説道です。けれども、世界がどうなるうが、歴史がどうなるうが、神の国を私たちの胸の中にもっている者、御霊を宿している者は決して希望を失わない。

「^せ為んかた^{のぞみ}尽くれども望を失わず、倒さるれども滅びず。これ常にキリスト

の十字架の死を負うが故に、キリストの復活の生命をいただいているからだ」

とパウロが言いました。どんな事があっても、この神の国は必ず成る、必ず来る。人間の努力ではない。原始力を受けとることだ。今の文明は原子力時代で、これは滅びる。キリストの原始力は救をきたらせるところの、神の国をきたらせるところの「ウルクラフト」(原始力)、神・キリストの根源の力です。この原始力を持っている人が本当の元氣ある人。これが本当の元氣、元の氣なんだ。

キリスト自身が私たちの希望の実体である。必ず、キリストは来たりたもう。どんな形で来るか。ヨハネ黙示録の言も暗号ですから、あの通り来るかは分からない。あの時は、ヨハネはパトモスであるように示された。しかし、それは徴だから、その徴以上の内容が展開してくる。未来も、将来も、天界も、じかじかの現実なんです。永遠の国を、永遠の時を正に私たちは呼吸してます。

賜物をいただいたことは課題を頂いたことである。救われてノホホンでは絶対でない。与えてやまない。人にそれを分け与えるところの任務をもっている。愛するとは人を助けることですから。

